

認定 NPO 法人グリーンバレーに携わる人たちの  
想いを伝えるニューズペーパー

# GREENVALLEY JOURNAL

グリーンバレージャーナル

vol.  
**17** December  
2022

特集

神山まるごと高専と  
グリーンバレー

# 神山まるごと高専とグリーンバレー

神山まるごと高専設立準備財団代表理事 大南信也  
神山まるごと高専設立準備財団理事 斉藤郁子  
一般社団法人神山まるごと高専専理理事 竹内和啓

聞き手 作田祥介

2022年8月31日、私立神山まるごと高専（以下、高専）の文部科学省の設置認可を受け、2023年4月の開校が決まりました。グリーンバレーでは、理事の大南信也さんと斉藤郁子さん（以下、いっこさん）、事務局長の竹内和啓さんが高専設立に向けた様々なプロジェクトに関わってきました。9月中旬、神山アーティスト・イン・レジデンスの作品が並ぶ大栗山に三人が集まり、高専をつくることになったきっかけ、高専とグリーンバレーの関係性、さらに、これからのグリーンバレーについて話を交わしました。



撮影場所 <<IN BETWEEN Hinoki + Sugi pavilion>> Ivan Juarez 2017

## 高専を作るきっかけ

— どうして高専をつくることになったんでしょうか。  
大南（以下、大） 神山には2010年10月かな。Sansanが初めてサテライトオフィスを置いた時に、寺田さん（※1）の1つの目標がSansanを10年以内に株式上場まで持っていく。で、ほれが彼的には2017年が目標だったんだろ。うな。一方で、もし上場を果たしたら、彼個人のプロジェクトとしてエネルギーと教育をやりたいと。で、途中何年か過ぎるわけやけども、若い30歳半ばぐらいの人の淡い夢を聞いたっていうところだな。

— 今度、株式上場の話がまずまず本能的に進んできて、2016年の1月かな。寺田さんから「神山で教育の事業をやるれないか」という話が具体的に上ってきて。  
それやったら「どういう形のものであれば、神山で受け入れられるんだろな」というのを色々検討して、小中一貫校とか中高一貫校ではないよなと。でも、あえて大学をつくるっていうのもちょっと違うのかな、という中で「高専でどうだろう」とみたいな話が持ち上がってきて。

— 神山の子たちの進学の選択肢にもなるし、今までの町の構造自体をめちゃくちゃにガラッと変えるようなことにもならんし。そして、高専の1つの仕組みとして、  
うのはあって。それがなんか一つの道しるべみたいになるのかな、っていう気はするけど。

## 竹内さんが高専に関わるきっかけ

— 当時、声をかけられた竹内さんほどんな風に感じましたか。  
竹内（以下、竹） 私も、教育に関われなかつたら神山に来てなかつたと思う。  
— 高専っていう言葉が、2018年の準備委員会の前に出るかと思うんですが、それを聞いた時は竹内さんはどう思いましたか。

— 神山に来ようかなと考えている時は、高専の話っていうのがまだなくて、学校を本当にゼロからつくるんやと聞いて、面白いなと思った。  
それまでに関わっていたのが小・中学校だったので、そのイメージがあつたけど、同じことをここでやるのはバッティングするので難しいなというのは、実際に暮らして、関わってみて思ったし。

— でも、高専って聞いた時、本当にめちゃくちゃすごいアイデアやなと。高専てみんなが見てないところやけど、いろんな意味でポテンシャルとして非常に面白いなというのはあって、聞いた時すごいワクワクした。  
いっこさんが高専に関わる理由

— いっこさんは、宿やレストラン、サウナ、オニヴァ農場など様々なプロジェクトをされていますが、教育とは少し遠い印象を持っていました。大南さんに声をかけら

ては、5年間の一貫教育で。進路的に考えれば、普通は高校入学時点で、もう大学入試のことを考えて、大学入れたら今度はもう、「どういうふう就職しようか」とみたいな感じで4年経って。この途切れるのが結構もつたないよな話で、高専がいいんじゃないかっていう話になって。

— 2016年12月にたまたま東京に呼ばれて話したら、寺田さんが会食に遅れてくるんよな。遅れてくるんでどうしたんかなと思つたら「実は昼の間、金沢で金沢工大の国際高専の関係者と色々話をしていた」とみたいなことやったけん。いや、これは本気なんやなと。もはや、そうなればこっちもある程度それを前提に準備が必要なんかなというのでもらつたりとか、はたして本当に行政としてサポートしてもらえるんかというのを探っていったり。

— ほんで、まずまず行けそうかなというんで、2018年8月にいよいよ進めていこうやという形。いっこさんと竹内さんも含めた準備委員会っていうのを神山の改善センターでやって、一番最初に集まったのは十二、三名やったな。

— それから、月に一回ぐらいのペースで、時に東京の電通に集まって。最終2019年6月21日っていうのが、構想発表。役場で記者発表したな。この間（※2）みたいな感じやったな。それからいろいろれたことをどんなふう受け取つたんでしょうか。  
斉藤（以下、斉） 私にとって、神山は学校なんですね。

— 神山に来て10年目を迎えて、日々を知恵や技術など、物事を深めていく時間に使い、過ごしている中で、本当に毎日学校に通っているようなんです。  
だから、こういう時間を10代の多感な時に持つてほしいって思つたんです。そうすれば、自分の取り扱い説明書みたいなものが、人生の早い段階で出来るから落ち着いて人生を設計をしていったりとかできるんちゃうかなと思って。

— 私は「この町が教育に最高の場所だ」と本当に思つたので、寺田さんからお話を聞いた時も、こうやってグリーンバレーがサポートしていくってなつた時も、力になれたらいいと思つたし。若い人が住んで関係人口が増えていくっていうのは、この町にとっても素晴らしいこと。神山に自分がお世話になつてる事への恩返しと、次の世代に何かしたいなと思つていた私にとっては、「ここで恩を送つていこう。何か自分にできることをやっていきたい」というふうに思います。

## 学びに年齢は関係ない

— 大南さんは「手届き」という言葉を時々使っていると思います。高専・学校づくりは手で届く範囲のことを超えていると想像しますが、それでもやってみようと思えたのはなぜでしょう。  
大 だけんあれでな。例えば、これまでのグリーンバレーを考えても、結局何を

な要素が集まってきて、結果認可が降りたみたいな。大まかに言えばな。

— 当初寺田さんから教育をしたいという夢を伺つた時、大南さんは、神山に高等教育機関があつたらいいなと思つていたのでしょか。

— 大 そこまではいつてないよな。「ほんな夢持つとる人がおるんや」ぐらいで、別にそういうものが必要であるとか必要でないといった熟度はなかつたっていう。ただこういう選択肢があるんだらうなっていうぐらいの話やろな。

— 2016年4月の時点では高専とは言うてないよな。学校つくろうっていう形で、まだどんな学校をつくるかの検討はできてないぐらいの時期よな。

— その時期から、高専の話が徐々に進んで行きました。その後、2018年にグリーンバレー理事長の役目を離れ、高専のプロジェクトを引き受ける中で、大南さんご自身としての思いなど何か変化があつたんでしょうか。

— 大 60歳ぐらいになった時から、グリーンバレーの理事会では「いつまでも理事長はやれんよ」という話はずっとしたけん。ちょうど切りをつけるんには一番ええタイミングかなと個人的には思つたとつたところで、高専っていうのも動き出しそうな予感があつた。

— 最初から理事会で、「神山高専担当っていう名前だけちょうだいよ」と。その方が、自分としても動きやすいし。グリーンバレーっていう手法に慣れた中で、今回だけは僕にとつて、なんか半分仕事になつたところは結構あつて。ほやけど結局はそんなチャンス、二度とないだらうなっていうのはあつたよな。ほんで、ほかに足を一歩踏み出してしまつたっていうところよな。

— 「しもた」として笑  
竹 それ、どれぐらいのタイミングだったんですかね。  
大 役場で構想発表したら、後戻りつて結構やりにくいけん。  
ほの手前は、後戻りできたと思うんよ。「やっぱりちょっとこの話なかつたこと」に「っていう。やけど一般にあんだけぶち上げてやつたら、もう後戻りはできんよな。」

— 竹 本、2016年に来た時には想像してなかつたところに来たなというのはあるかな。さらに5年後、卒業生が出る頃「本当にどんなことになつてるんだらう」というのは今からでも思う。本、こんなことが起こるんだなつて。こんなに大変なことやとわかつてたらやつたのかなつて。わかんなくなつたからこ

— 斉 私自身もこの学校づくりの場で、す

ンバレーの全体を背負つとつたら、カバーできない部分が出てくるけん。ある程度、荷物を下ろして高専に集中してやっていった方がええんかなみたいな判断はありましたよな。

— 高専の方に関わつていこうとそれまでの荷物を少し降ろす中で、どんなことを高専のプロジェクトの先に見ていたんでしょうか。

— 大 最終そこまで来たなら町の未来をつくるんは、教育って非常に大きなコンテンツかなつていうところはあつたよな。

— だけん、ちょうど竹内さんが入つてきて誘つたっていうか、竹内さんも教育やりたいっていう話やつたけん。「グリーンバレーで動いたらなんかなチャンスは訪れるんちゃうかな」ぐらいの感じでは投げかけとつたと思うんよな。

— 割とこの辺りは僕見えるんよ。笑  
ほなけん（※3）、2013年にコンプレックスを改修したやん。ほうした時に、坂東君や（※4）いろんな建築家に手伝ってもらつたけども、設計料をまず出せんから、坂東君たちに「設計料は出せんけど、結局この場所って、これから多分いろんな人が集まってきて、すごい面白い場所になつて、ほんでそこから次のものが生まれるから。その時点で建築家にとつたら、お金にならん仕事やっと思いつても、後々多分ご褒美があると思うよ」とみたいな話をしとつて。で、そのご褒美が彼らがベネチアと呼ばれた（※5）っていうことかなみたいな感じのところはあつて。

— 割とその辺りはな、自分の感覚の中



「ごい成長するっていうか。やっぱり関心があるからこそ、熱い議論もあるし、いい大人になって、こんなにも心をね、ボンボンって当てる議論するとか、本当にすごい体験だし。始まって多分ものすごい色んなことが起きて、私たちが教職員も、みんなでもた一つ成長して。」

大 やけん、「現実の中でなんか意味があるとか、わけがあるっていうことばっかりを見ん」っていう話やと思うんよな。そればっかり見とつても、未来って開けてこんやん。今の時点で意味があったり、これからなんかのためになるとかいう話ではなくて、もうちょっとそこを超えたものに、思いが及ぶかどうかの話やと思うんよな。

大 やけん、「現実の中でなんか意味があるとか、わけがあるっていうことばっかりを見ん」っていう話やと思うんよな。そればっかり見とつても、未来って開けてこんやん。今の時点で意味があったり、これからなんかのためになるとかいう話ではなくて、もうちょっとそこを超えたものに、思いが及ぶかどうかの話やと思うんよな。

大 やけん、「現実の中でなんか意味があるとか、わけがあるっていうことばっかりを見ん」っていう話やと思うんよな。そればっかり見とつても、未来って開けてこんやん。今の時点で意味があったり、これからなんかのためになるとかいう話ではなくて、もうちょっとそこを超えたものに、思いが及ぶかどうかの話やと思うんよな。

大 やけん、「現実の中でなんか意味があるとか、わけがあるっていうことばっかりを見ん」っていう話やと思うんよな。そればっかり見とつても、未来って開けてこんやん。今の時点で意味があったり、これからなんかのためになるとかいう話ではなくて、もうちょっとそこを超えたものに、思いが及ぶかどうかの話やと思うんよな。

年ぐらいやつてきて、結果的に認可が下りて。いよいよスタートできるっていう状況は、まさに僕らが高専で育てようとする学生たちのことを、先に実体験できたとつていうのは非常に大きいと思うんよな。

僕たちの体験として語れるところってのはもうできてきとるやん。「いやいや、この学校つくるん、実はまあまあ大変だったんだよ」っていう体験を言葉でなしに、僕らが体感しながら経験できたってのは非常に大きくて。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

いもんやし、別に年代で区切る話でも全くなくて。だから、年取つとるから成長しないわけではなくて、いろんな段階ごとに成長つてあるんかなと思うんよな。

### グリーンバレーの役割

大 大変なこの3年の中で、グリーンバレーはどんな役割りを果たしていたんでしょか。

大 実際問題としてグリーンバレーがなかったら、学校はできてないと思います。それはもう確実に。具体的に言えば開校資金。グリーンバレーが認定NPO法人を取ったことよつて、結果、非営利の事業にグリーンバレーで受けた寄付を高専のプロジェクトに使えるつていう枠組みができてきとるわけよな。ほなけん「認定を取つた」つていうのが非常に意味を持つてきとるわけよな。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

学校ができることは想定してないわけよな。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

### これからのグリーンバレー

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。

大 僕たちと話しても、今までになかったような力を持った言葉になって伝わっていくと思うんよな。僕自身もこの高専をつくる過程で、自分たちが理想に描いてる学校をつくる資格があるかどうかというのを常に問われよるなというんは、日々噛み締めながらやつてはきとるよな。初めはもう想像だったものが現実になつていく。その過程を実体験としてどれだけ大変であつても形にしたと、学生たちに伝えていけるよ。



# ちょっと小ばなし

## 古屋さんの神山での暮らし

文・生津勝隆

「私は別に、起業家やエリートを育てたいとは正直思っていません」と、教員採用面接で啖呵を切った古屋佑奈さん。「でも、自己管理できる人、自分の進む道とかやることを自分で選択できる人を育てていきたい」。その思いが、神山まるごと高専の方向性と一致して、来春から体育の授業を受け持たれます。

神山まるごと高専の体育って、どんな授業になるのですか。古屋さんは「目的のある体育」と答えてくれました。体育を学ぶのではなく、体育で学ぶ。「スポーツを通じてコミュニケーション能力を高めたり、スキル上達の過程は人生の他のことにも転移したりできるんだよということを学生たちに伝えたい」と古屋さんは語ります。

高専の教員は、起業家精神を育成するスタッフとして副業



を推奨されています。古民家を改修し、念願だったゲストハウスとシェアハウスを自宅にオープンする予定の古屋さん。いろんな人が出入りする神山だからこそ、集まる場所があれば自然と出会いが生まれる。そんな場所になることを望んでいます。

古屋 佑奈

北海道出身。大学卒業後、小学校教員、一般企業勤務を経て、大学院で「国際バカロレア」を学ぶ。その後高知市内の中学校に勤めていたが、神山まるごと高専をきっかけに神山へ移住する。

## 斉藤郁子さんに聞いた Sansan の合宿と、教育の話

文・安達優香

いっこさんと寺田さんの出会いは、2012年。いっこさんがオニヴァのオープンに向け、毎週末夜行バスで東京から通っていた頃、ある日寺田さんと一緒に雨乞いの滝へ行くことに。険しい鎖場を登るなどの体験をする中で「Sansanの新入社員研修もガッツと神山でやりましょう」ということになったそう。

初めての合宿は2013年。とてもハードなコースだったといっこさんは笑顔で言います。新入社員12人を引き連れ、一泊二日で神山から山に入り尾根伝いに佐那河内へ。途中荷物に



塩を詰め忘れ、塩気のない食事を囲むこともあったとか。それでも「自分の体にどのくらい塩が必要かなど、体験からしか学べないことは多い」と、どんな状況もポジティブに学びに変換していく姿勢が格好いい。

そんないっこさんが、寺田さんから「神山で学校をつくるってどうかな」という話を聞くことになったのは2回目の合宿。当時は振り返って「学生、先生、町の人、みんなが互いに関わり合う関係っていいよなと思った」といっこさん。

いっこさんと教育がこうして結びついていったのは、日頃から学びを大事にされているからこそなんだなと感じました。

## 編集後記

●今回の制作では、主に「グリーンバレーと神山まるごと高専の今とこれからの関係」について探ってみました。その中で、グリーンバレーの存在やその過去に引き合う時間があることも長かったように思います。イン神山の記事を10年遡って読んでみたり、過去のジャーナルにあたってみたり。もちろん大栗山でのインタビュー、文章作成も含めてそういう時間だったと思います。過去からずっと繋がってきてるんだなと、物語を読んでいるような夢見心地な時

間でした。そのほんの一部ではありますが、出来る限りその人が使う言葉と雰囲気を残して、皆さんの元にもお届けできること、とても嬉しく思います。(安達)

●「神山まるごと高専とグリーンバレー」特集の今号。高専に関する情報は、テレビ、新聞、雑誌、ラジオ、WEB、SNSなど様々なメディアで伝えられています。では、本誌だからこそお届けできることは何か。そして、神山の面白さを伝えるにはどうしたらいいだろう。そんな問いを頭の中に巡らせながら臨んだ大栗山でのインタビュー。大南さん、斉藤さん、竹内さんの話は過去・現在・未来を行き来し、想像を超えた方向に飛び跳ねていく展開に。制作にあたってはその内容を素材に沿った形で掲載しようとして、デザインチームの小林さん・安達さんに工夫を凝らしてもらい、言葉の面白さを大南さんの阿波弁やいっこさんの擬音語を残すなどしました。読者の皆さまの心に届く何かが少しでもあれば幸いです。(作田)



グリーンバレーはこれまでも、そういう意味で、よそからやってくるエイリアンみたいな人と地元を繋ぐブリッジ役というか、ボンド役、マグネット役というのか、接着剤というのか、なんかそういう役にとてもなると思うんですね。

今地元の人々の意見を聞くと、学校もまだやっぱり実は定着してないと思うんですね。これがみんなに受け入れられて、本当に「神山の学校」って思ってもらえるようになるのは、グリーンバレーにとつて、すごく大きな使命というか、そこが一番今実は大事なところだなと思つて。学校づくりでもう、まちづくりの最終形でもあろうようなすごいプロジェクトだけど、グリーンバレーがなかったらこの学校をつくるのは非常に難しく。みんなが新しいことに向かう時にグリーンバレーのような役割のものって絶対に必要で。

きっと、学校には知った顔はいないからものを言わないっていう人も、グリーンバレーの人には言いにくるじゃないですか。いろんな意見を言いやすいついていうか、心を開きやすいついていう場合もあるし、やっぱりそういう場所になれたらなと。

## 夢を見出した時

大 2008年の『イン神山』を作った時の公開のブログ(※8)に、映画の『ワールド・オブ・ドリームス』のことに書いたんやけども、結局ああいうことやと思うよな。

野球好きの主人公レイ・キンセラが、  
“If you built it, they will come.”

「それを作れば、彼らがやってくる」っていう不思議な声をトウモロコシ畑で聞いて、その畑を野球場に変えて。結果その球場に遠くからたくさん人が集まってくるついで。

そういうふうに入つて夢を持つとると思うんよな。ほなけん、それを信じて。

これは、グリーンバレーにとつてもおんなじで、理事にとつても会員にとつても同じで。夢を持って、その延長線上になんかが起こる可能性があるついでというものを常に持つておつたら、勝手にそういう場所に連れて行つてくれたりするんかなとは思ふよな。

斉 なんかもそういう意味で、神山に来てから本当にやりたいこととかも沸々と自分から出てくるから、きっと学校ができて、いろんな若い方が自由な発想で、のびのびと夢を描き出した時に、神山のみんながそれを見て、ポコポコって刺激を受けて、ポコポコって色々出てくるし、学生もポーポーって、ポポポボンって、自由な発想が出てくるし、いろんな人が好きを暴走させる時の、グリーンバレーのそういう役割みたいなのがね、あるんじゃないかなって思つて。で、自分の中に実はあったけど、ちょっとふたしてたような夢もパコンって開いたり。そういうふうに入つて清々しく、すこやかに動くじゃないですか。そういうのがまににあるついで重だし、この役割は将来にも届けていって、この学校と伴走して行くついでとすこく面白いかなと思つて。

「たくさんありますね。やれること。みんなですごい話もちよつとこう話せ

る機会があるといいですね。  
斉 うん、全員でね。  
全員きつと面白いアイデアがなんかあると思うし、一回そういう枠を取つてお話ししてみるついでのはいいんじゃないかなと思つて。みんなで本当にね、知恵を出しちゃった方が面白くなるし。いろんな見方で。

※1 Sansan株式会社代表取締役/CEO、神山まるごと高専理事長。Sansan株式会社は名刺のクラウド管理などのDXサービスなどを提供している。

※2 2022年8月31日に高専の文部科学省の設置認可が降りた。9月1日にはメディアに向けた記者発表が行われ、多くの記者やメディア関係者が集まった。

※3 「ほなけん」は、徳島の方言で「だから」という意味で使用される。その他にも「やけん」「だけん」が同じ用法で用いられる。

※4 徳島県出身、建築ユニットBUSメンバーの一人。神山町内のサテライトオフィスであるブルーベアオフィスやWEEK神山の設計を同じくメンバーの須磨一清氏、伊藤暁氏と手懸ける。

※5 2016年の第十五回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展にBUSとして参加。日本館で「えんがわオフィス」や「WEEK神山」の映像展示を行った。

※6 神山町の飲食店「めし処萬や山びこ」の店主。神山町出身。

※7 グリーンバレーの前身である国際交流協会が、1993年から約12年間、徳島県に新しく赴任してくるALTの新人研修として神山で三泊四日の民泊事業が実施されていた。その最終日にコットンフィールド(神山町内のキャンプ場)で最後の週末に行われたイベント。

※8 イン神山は、徳島・神山町の状況を分かち合うサイト。大南氏が同サイトに2008年6月4日「ふくこそ『イン神山』へ」を投稿している。



次は自前の罟が作れるようになりたい。弟子の一人が、罟を引き上げてみる。

「むかし、うなぎがよけおってな」「天然物のうなぎの味は、また格別じゃ」と名人はいう。そこで、名人が若いころにこしらえた十本の罟を、いっしょに川に仕掛けてみた。仕掛けの場所や、罟の向き、角度にコツがあるらしい。

翌朝、引き上げてみると、罟の一つにもう、うなぎが入っていた。何匹か捕れたら、うなぎパーティーやろうねと皮算用。

次の日も十本、その次の日も十本、場所を変えて仕掛けてみたが、すべて空振り。うなぎは鮎喰川に確かにいる。でも、滅多に捕れない。これが今年の自由研究。

まちで生まれ育って、サラリーマンをやってきたボクは知らないことが多いから、名人たちに教えを乞うて、できることを少しずつ増やしていくしかない。

神山のいけてるオッサンへの道は険しい。

## メンバーリレー

吉田 涼子

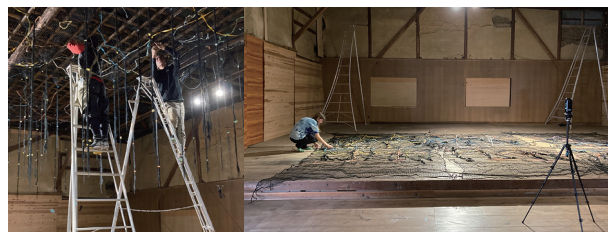


はじめまして、昨年7月から移住交流支援センターを担当している吉田です。神山に来て5年経ちますが、ここ1年で自分の町の把握度合いが大きく広がりました。空き家を見に普段行くことのない山上の集落に行くこと、家主さんに昔から今に至る暮らしの変化を具体的に伺うこと、なかなか得難い経験をさせてもらっています。

そんな中、最近興味を魅かれたものの一つは、「消えた集落」です。地番を聞いたものさでの土地なのか。既に森になり、到達できる道らしきものが見当たらない。しかし、よく見ると人の痕跡があるやなしや・・・五感をフル活用して探索してみる。そういえば、この感覚は言葉のわからない外国での一人旅のよう。

もう一つ、最近興味の湧いているものは「ペーハ小屋」、一度気になりだすと目に付き始めました。町内での遭遇頻度が絶妙で、またあった!前も通ったことあるはずの道なのに気づいていなかったのか!などという発見に一人で盛り上がれます。

つついっ何でもネット検索してしまいがちな私ですが、体を動かしてゆっくり世界が広がっていく感覚は何にも代えがたい楽しみかもしれません。



左上：エーヴァ、オープンアトリエで屋外作品の構想を披露  
右上：ジェイミー、課外授業を行った神領小学校4・5年生と  
下：ルース、寄井座で制作開始!

### 3年ぶりの開催!

#### 神山アーティスト・イン・レジデンス秋のプログラム

念願の開催となった KAIR 秋のプログラムも佳境に入り、展覧会を目前に町内のあちこちで準備が進められています。このジャーナルが発行される頃には、展覧会も終え、ほなまた!と、帰路につくアーティストたちとの別れを惜しむ時を迎えているでしょう…。

今日までの約2ヶ月間、海外から参加のエーヴァとルース、関東から参加のジェイミーが神山で暮らし、歴史や自然、郷土などについてインタビューをしたり散歩をしたり、リサーチをしながら制作を進めてきました。

イベント第1弾は、アーティストトーク。これまでの制作活動や作品について語って頂きました。その数日後、新月の夜には、アルゼンチン出身のアーティスト、ルースの発案で星を見る会を開催。満天の星空の下で天の川を眺めながら、天文学を専門とする彼女の、アーティスト目線での秋の星座解説に耳を傾けました。制作過程を見学しながら、アーティストから直接説明を聞くオープンアトリエ、町内小中学校での課外授業を無事に終え、作品展に向けて怒涛のような制作の日々を過ごしています! (10月27日執筆)

...

楽しく、賑やかに交流しながら、充実したプログラムを進める事が出来ました。ご協力くださった皆様、どうもありがとうございました! **KAMIYAMA.AIR**



表紙写真 「棚田の稲刈り」上分江田集落にて (生津勝隆)

**発行・お問合せ** **認定特定非営利活動法人グリーンバレー**  
〒771-3310 徳島県名西郡神山町神領字中津 132  
TEL : 088-676-1178  
Email : greenvalley@in-kamiyama.jp



活動継続・発展のために寄付での支援をお願いします  
グリーンバレーの活動は、皆様からのご支援によって支えられています。私達の活動趣旨にご賛同の上、あたたかいご支援をお願いいたします。



<https://www.in-kamiyama.jp/donation-to-greenvalley>

詳細ページ